

ルカ福音書5章12節～6章11節の資料

弱小一致とマルコの改訂版をめぐる

嶺 重 淑

序

近代以降、聖書学が飛躍的に発展した結果、マタイ、マルコ、ルカ福音書の成立過程を問う、いわゆる共観福音書問題をめぐる議論は大きく進展した。今日では、マタイ、ルカ両福音書が、マルコ福音書及びイエス語録資料（Q資料）、さらにはそれぞれ独自の資料（マタイ特殊資料とルカ特殊資料）を用いて構成されたという点は大筋において認められている。

しかしながら、この二文書資料説（四資料説）によって共観福音書の成立の経緯をめぐるあらゆる問題が解明されたわけではない。例えば、マタイ、ルカ両福音書が明らかにマルコ福音書に依拠している箇所であっても、細部においては両者の記述が共通してマルコとは異なる、いわゆる「弱小一致」（マイナー・アグリーメント）が多くの箇所を確認されている¹。二文書資料説に従うと、マタイ、ルカ両福音書に共通する語句はQ資料に帰されることになるが、現実問題として、両福音書記者が一致して、マルコから取り入れたテキスト内部に一部の語句のみをQ資料から採り出して挿入したとは考えにくい²。その意味でも、

1 「弱小一致」については、特に A. Ennulat, *Die „Minor Agreements“. Untersuchungen zu einer offenen Frage des synoptischen Problems* (WUNT 2.62), Tübingen 1994を参照。

2 この他、T. Schramm, *Der Markus-Stoff Bei Lukas. Eine Literarkritische und Redaktions-geschichtliche Untersuchung*, Cambridge 1971は、ルカがマルコに加えて、それとは異なる資料を用いた可能性を指摘しているが、複数の資料から合成されたという想定は同様の理由から極めて難しい。

そのような場合は、両福音書記者が、同様の編集的処置を行ったことが説得力をもって論証できない限り、両者が用いたマルコのテキストが現行のマルコ本文とは異なっていた可能性を考慮すべきであろう³。

そこで本稿では、ルカ福音書の中でも5章12節～6章11節の箇所をサンプルとして取り上げて、この問いに取り組んでいきたい。ここで特にこの箇所を取り上げたのは、下表からも明らかなように、この箇所のルカ福音書の各段落が、（マタイ福音書の場合とは異なり）その内容と配列においてマルコ福音書1章40節～3章6節と一致しており、マルコに依拠していることは明らかなからである。さらには、この箇所全体が、癒しの物語によって枠付けられているのみならず（5:12-16, 17-26; 6:6-11）、第二段落以降（5:17-6:11）、ファリサイ派を中心とする敵対者とイエスとの論争という統一的主題においてまとめられているという点も、この箇所に注目した理由である。そこで以下の部分では、この箇所における各段落のテキストの分析を通して、この一連の箇所で資料として用いられているマルコ本文が現行のマルコ本文と見なしうるかどうかという点について検討しつつ、この箇所全体の編集のプロセスについて考察していきたい。

【共観福音書の対応関係】

| | 主 題 | マタイ | マルコ | ル カ |
|---|--------------------|---------|---------|---------|
| 1 | 皮膚病患者の癒し（清め） | 8:1-4 | 1:40-45 | 5:12-16 |
| 2 | 中風患者の癒し | 9:1-8 | 2:1-12 | 5:17-26 |
| 3 | レビの召命 ⁴ | 9:9-13 | 2:13-17 | 5:27-32 |
| 4 | 断食問答 | 9:14-17 | 2:18-22 | 5:33-39 |
| 5 | 安息日の麦穂摘み | 12:1-8 | 2:23-28 | 6:1-5 |
| 6 | 手の萎えた人の癒し | 12:9-14 | 3:1-6 | 6:6-11 |

3 共観福音書問題をめぐるもう一つの未解決問題として、マタイ、ルカ両福音書が明らかにQ資料に依拠している箇所においても、細部においては多くの相違点が確認される点があげられる。これについては、それらの相違点を双方の福音書記者による独自の編集作業の結果として説明できない限り、両者が用いたQ資料が同一ではなく相互に異なっていた（マタイ版Qとルカ版Q）可能性を考慮する必要がある。

4 ルカにおいては、「レビの召命」とその直後の「断食問答」は、宴会の場面設定において継続していることから、本来は同一の段落として扱うべきであろう。

1. 皮膚病患者の癒し（ルカ5:12-16）

1.1. テキスト

12 さて、彼（イエス）がある町に滞在していたとき、見よ、そこに皮膚病（レプラ）に〔全身〕覆われていた男がいた。彼はイエスを見て顔を〔地につけて〕ひれ伏し、「主よ、あなたが望まれるなら、私を清めることがおできになります」と言って彼に嘆願した。13 そこで、彼（イエス）が手を差し伸べてその人に触れ、「そうしよう。清くなれ」と言うと、たちまち皮膚病（レプラ）は彼から去った。14 そして、彼（イエス）自身はその人に、〔このことを〕誰にも話さないように厳しく命じ、「ただし、行って祭司に自ら（身体）を見せ、モーセが定めたとおりにあなたの清めについて献げ物をし、人々に証明しなさい」と言った。15 しかし、彼（イエス）の噂はますます広まり、大勢の群衆が、〔話しを〕聞くために、また、自分たちの病気を癒してもらうために、集まって来た。16 しかし、彼（イエス）自身は人里離れた所に退いて祈っていた。

1.2. 文脈と構成

最初の弟子たちの召命について述べられた直前の段落（5:1-11）に続いて、ここにはある皮膚病患者がイエスによって癒された物語が記されている。この段落と直前の召命記事との間には、時間、場所、主題において連続性はなく、召し出されたばかりの弟子たちも登場しない。また、この段落と後続の中風患者の癒しの段落（5:27-26）は、いずれも典型的な治癒物語であって同様の表現（καὶ ἐγένετο ... ἐν μιᾷ τῶν ...）で始まっている点で共通しているが、この段落そのものはイエスが祈る場面で締めくくられていることから、両者の結びつきも緊密ではなく、その意味でもこの段落は前後の文脈から独立している⁵。この段落は、①導入部（12節a）、②皮膚病患者の願い（12節b）、③皮膚病患者の清め（13節）、④イエスの指示（14節）、⑤噂の広まりと群衆の殺到（15節）、⑥イエスの退去（16

5 F. Bovon, *Das Evangelium nach Lukas*, I (EKK III/1), Zürich/Neukirchen-Vluyn 1989, p. 237.

節)の六つの部分から構成されている。

1.3. 資料と編集

ルカはカファルナウムにおけるイエスの宣教活動の記述(4:31-44)をマルコ福音書1章21-39節の記述をもとに構成しているが、その直後の最初の弟子の召命記事(5:1-11)を挟んで、5章12節から6章11節までの箇所については、再びマルコの記述(マコ1:40-3:6)の内容と順序に従っている。この皮膚病患者の癒しの段落はマルコ福音書1章40-45節及びマタイ福音書8章1-4節に並行しており、ルカはマタイと同様、全体としてマルコの記述に従っている。もっとも、ルカとマタイの間には、καὶ ἰδοὺ ἢ κύριε (12節/マタ8:2)、σπλαγχνισθεὶς (マコ1:41)の省略、ἤψατοの目的語としてのαὐτοῦ (13節/マタ8:3)、καὶ λέγει αὐτῷ (マコ1:41)に対するλέγων (13節/マタ8:3)、εὐθύς (マコ1:42)に代わるεὐθέως (13節/マタ8:3)等、マルコに対する共通点が少なからず確認できる。これらの弱小一致がすべて、マタイとルカの相互に独立した編集作業の結果生じたとは考え難いことから、両者はともに現行のマルコ本文とは異なる改訂版を用いたと見なすべきであろう⁶。おそらくルカは、マルコの改訂版を主な資料として用いつつ、冒頭の導入部(12節a)を新たに構成し⁷、末尾の16節の内容を改変するなど⁸、特に最初と最後の部分に手を加えつつ、この箇所全体を編集的に構成したのであろう⁹。

なお、山上の説教の直後にこの段落を据えるマタイにおいては、この段落は山上説教直後の「イエスが山から下ると」という記述で導入され(マタ8:1)、皮膚病患者に対するイエスの指示の場面で結ばれており、その後の人々の反応やイエスの退去については言及されていない。

6 H. Klein, *Das Lukasevangelium* (KEK), Göttingen 2006, p. 211やEnnulat, op. cit., p. 58も同意見。

7 [καὶ ἐγένετο ἐν τῷ + 主語を伴う不定詞] は七十人訳聖書に頻出する構文で明らかにルカ的であり、καὶ ἰδοὺもルカ文書に頻出する(ルカ7:37; 11:31; 13:11; 19:2; 23:50; 使8:27)。

8 動詞ὑποχωρέω(退く)は新約ではルカにのみ使用されている(5:16; 9:10)。

9 例えば12節bのδέομαιは新約用例22回中15回がルカ文書に使用されている。

2. 中風患者の癒し（ルカ5:17-26）

2.1. テキスト

17 さて、ある日のこと、彼（イエス）自身が〔人々に〕教えていると、ファリサイ派の人々と律法の教師たちがそこに座っていた。彼らは、ガリラヤとユダヤのすべての村から、そしてエルサレムから来たのである。主の力が、彼（イエス）に病気を癒させていた。 18 すると見よ、男たちが中風を患っている人を床に乗せて運んで来て、彼を〔家の中に〕運び入れて彼（イエス）の前に置こうと試みた。 19 しかし、群衆のために、彼を運び込む方法が見つからなかった。 20 イエスは、彼らは屋根に上って瓦〔をはがしてそ〕の間から、〔人々の〕真ん中のイエスの前に、彼（病人）を床ごとつり降ろした。 21 イエスは、その人たちの信仰を見て、「人よ、あなたの罪はあなたに対して赦された」と言った。 22 そこでイエスは、彼らの考えを見抜いて彼らに答えた。「心の中で何を考えているのか。 23 『あなたの罪はあなたに対して赦された』と言うのと、『起きて歩きなさい』と言うのと、どちらがたやすいか。 24 しかし、人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることをあなたがたが知るために」——そして中風の人に言った——「私はあなたに言う。起き上がり、床を担いで家に帰りなさい」。 25 その人は即座に彼らの前で立ち上がり、〔自らが〕寝ていた台を担いで、神を賛美しながら家に帰って行った。 26 大変な驚きがすべての人を捕え、彼らは神を賛美し始めた。そして、恐れに打たれて、「今日、驚くべきことを見た」と言った。

2.2. 文脈と構成

直前の皮膚病患者の癒し（清め）のエピソードに続いて、ここでは中風患者の癒しについて述べられているが、それとともに、罪を赦す人の子イエスの権威についても言及される。また、この段落以降の五つの論争物語において、イ

エスとファリサイ派らの敵対者との対立の場面が描かれ、イエスを受容・拒絶をめぐって、ユダヤの民が二つの陣営に分化していく状況が記されていく (5:17-6:11)。

前述したように、この段落は直前の皮膚病患者の清めの段落と同様の表現 (καὶ ἐγένετο ... ἐν μιᾷ τῶν ...) で導入され、前段と同様にイエスによる癒しの業について語っている。段落全体は、論争物語の要素 (21-24a節) が治癒物語の要素 (18-19節及び24b-26節) によって枠付けられる形で構成されており、①序：状況設定 (17節)、②中風患者の運び込みと罪の赦しの宣言 (18-20節)、③敵対者たちの反応 (21節)、④イエスの返答と中風患者への指示 (22-24節)、⑤中風患者の反応 (25節)、⑥結び：人々の反応 (26節) の六つの部分に区分できる。段落の中核をなす②～④の各部分を、この段落の中心主題である「罪の赦し」に関わる ἀφένονται σοι αἱ ἁμαρτίαι σου (20, 23節) 及び ἁμαρτίας ἀφεῖναι (ἀφεῖναι ἁμαρτίας) (21, 24節) という表現が結合し、さらに δοξάζω τὸν θεόν (25, 26節) という表現が④と⑤を結合している。

2.3. 資料と編集

この段落はマルコ福音書2章1-12節及びマタイ福音書9章1-8節に並行しており、ここでもルカは基本的にマルコのテキストに従っている。その一方で、καὶ ἐγένετο ἐν μιᾷ τῶν ... , καὶ αὐτός (癒しの文脈における) δύναμις (17節)、不定詞を伴う ἐξήτουν, ἐνώπιον (18節)、παραχρήμα, ἀναστάς, ἐνώπιον (25節)、δοξάζω τὸν θεόν (25, 26節) 等、主に冒頭と末尾の部分にルカ的な語彙も認められることから、ルカはマルコのテキストをもとに、独自の視点から修正を加えつつ、自らのテキストを構成したのであろう。

また、マタイとルカの間には、καὶ ἰδοὺ (18節／マタ9:2)、ἐπὶ κλίνης (18節／マタ9:2, 6; 後続の箇所ではマルコは κράβαττον、ルカは κλινίδιον を使用)、λέγει (マコ2:5) に代わる εἶπεν (20, 22節／マタ9:2)、τῷ πνεύματι αὐτοῦ 及び εὐθύς (マコ2:8) の省略、τῷ παραλυτικῷ 及び καὶ ἄρον τὸν κράβαττόν σου (マコ2:9) の省略、ἐπὶ τῆς γῆς に対する ἀφιέναι ἁμαρτίας の後置 (24節／マタ9:6)、ἀπῆλθεν εἰς τὸν οἶκον αὐτοῦ (25節

／マタ9:7)、人々の恐れのもチーフ (26節／マタ9:8) 等、多くの共通要素が見られる¹⁰。ここでも、これらの弱小一致のすべてを双方の福音書記者それぞれの編集作業として説明することは難しい¹¹。そこで、例えばF. Bovonは、両者が現行のマルコとは別に口伝資料を共有していた可能性を示唆しているが¹²、両福音書記者が複数の資料を同様の仕方で結合したとはやはり想定しにくく、ここでもむしろ、両者はマルコの改訂版を用いたと考えるべきであろう¹³。

3. レビの召命 (ルカ5:27-32)

3.1. テキスト

27 その後、彼（イエス）は出て行って、レビという名の徴税人が収税所に座っているのを見て、「私に従って来なさい」と言った。28 すると彼は、すべてを棄てて立ち上がり、彼（イエス）に従って行った。

29 そして彼は、彼（イエス）のために自分の家で盛大な宴会を催した。そこには徴税人たちや他の人々が大勢いて、彼らと一緒に食事の席に着いていた。30 すると、ファリサイ派の人々や彼らの律法学者たちはつぶやいて、彼（イエス）の弟子たちに言った。「なぜ、あなたたちは、徴税人や罪人たちと一緒に食べたり飲んだりするのか」。31 そこでイエスは彼らに答えた。「医者が必要とするのは、健康な人ではなく病人である。32 私は義人を招くためではなく、罪人を招いて悔い改めさせるために来たのである」。

¹⁰ Schramm, op. cit., pp. 99-100参照。

¹¹ H. Schürmann, *Das Lukasevangelium*, I (HThK III/1), Freiburg/Basel/Wien ⁴1990, p. 285 n. 45やI. H. Marshall, *The Gospel of Luke: A Commentary on the Greek Text* (NIGTC), Exeter 1978, p. 211に反対。

¹² Bovon, op. cit., pp. 245-246.

¹³ Ennulat, op. cit., p. 68; U. ルツ『マタイによる福音書 (8-17章)』(EKK新約聖書註解I/2) 小河陽訳、教文館、1990年、58頁; Klein, op. cit., p. 215; E. Eckey, *Das Lukasevangelium. Unter Berücksichtigung seiner Parallelen*, I (1,1-10,42), Neukirchen-Vluyn 2004, p. 253も同意見。

3.2. 文脈と構成

二つの癒しの物語（5:12-16, 17-26）のあとには、レビの召命の記述（5:27-32）が続くが、この段落後半の宴会の場面には、最初の召命物語以降、しばらく姿を見せなかった弟子たちが登場し、また、前段に引き続いてファリサイ派と律法学者が登場している。この段落は「罪の赦し」の主題を直前の中風患者の癒しの記事（5:17-26）と共有しているが、ルカはイエスの湖畔での群衆への教えに関するマルコの記述（マコ2:13）を削除し、μετὰ ταῦταという表現を冒頭に用いることにより、両者をより緊密に結合している。なお、マルコにおいては、宴席での徴税人たちとの会食をめぐる問答とその直後の断食問答は、明らかに異なる対話者との間でなされており、二つの場面は明確に切り離されているが、ルカにおいては宴会の場面がそのまま継続し、同一の対話者（ファリサイ派らの敵対者）から問いが発せられている。その意味でも、マルコにおいては独立していた二つの段落をルカは結合し、一続きの饗宴の場面として構成している。

罪人の招きのモチーフ（27, 32節）によって枠付けられるこの段落は、レビの召命の記述（27-28節）とその直後の宴会での罪人との会食をめぐるイエスと敵対者との問答（29-32節）とに区分されるが、おそらく両者は元来結びついておらず、マルコ以前に結合したのであろう¹⁴。その一方でルカは、28節に引き続いて29節でもレビを主語に設定することにより、双方の部分をより緊密に結合している。

3.3. 資料と編集

この段落は、マルコ福音書2章13-17節及びマタイ福音書9章9-13節に並行しているが、ルカはここでも基本的にマルコの記述に従っている。もっとも、この段落においても、マルコの編集的枠組み（マコ2:13）、多くの人々の信従に関する言及（マコ2:15c）、状況の反復（マコ2:16a）等の欠如、λέγει（マコ2:14, 17）

14 R. プルトマン『共観福音書伝承史Ⅰ』（プルトマン著作集1）加山宏路訳、新教出版社、1983年、31-32頁。

に代わる εἶπεν (27, 31節／マタ9:12)、ὅτι (マコ2:16) に代わる διὰ τί, (30節／マタ9:11) 等、マルコの記述に対してルカとマタイの記述に一致する箇所が少なからず認められる。一部の研究者は、これらの弱小一致は両福音書記者の編集作業として理解できると主張しているが¹⁵、これらすべてを双方の編集作業に帰すことは難しく、ここでもルカとマタイはマルコの改訂版を用いたものと考えられる¹⁶。ルカはこのマルコの改訂版を唯一の資料として用い、自らの視点からこれに手を加えつつ、この箇所全体を編集的に構成したのであろう。

4. 断食問答 (ルカ5:33-39)

4.1. テキスト

33 人々は彼（イエス）に言った。「ヨハネの弟子たちは度々断食し、祈っており、ファリサイ派の弟子たちも同じようにしています。しかし、あなたの弟子たちは食べたり飲んだりしています」。 34 そこで、イエスは彼らに言った。「あなたがたは、花婿と一緒にいるのに、婚礼の客に断食させることができるだろうか。 35 しかし、花婿が彼らから奪い取られる日々が来る。そのときには、それらの日々には、彼らは断食することになる」。

36 そして、彼（イエス）は彼らに譬えを語った。「誰も、新しい服から布切れを破り取って、古い服に継ぎ当てたりはしない。そんなことをすれば、新しい服は破れるし、新しい服から取った継ぎ切れも古い服には合わない。 37 また誰も、新しいぶどう酒を古い革袋に入れたりはしない。そんなことをすれば、新しいぶどう酒は革袋を破って、それは流れ出し、革袋もだめになる。 38 そうではなく、新しいぶどう酒は、新しい革袋に入れなければならない。 39 また、古いぶどう酒を飲めば、誰も新しいものを欲しがらない。『古いものがよい』と言うのである」。

15 例えば、J. A. Fitzmyer, *The Gospel according to Luke I-IX* (AB 28) New York ²1983, p. 587やルツ、前掲書、716頁注5。

16 Ennulat, op. cit., pp. 68-73やKlein, op. cit., p. 223も同意見。

4.2. 文脈と構成

罪人との会食をめぐる前段における問答に続いて、ここではその会食と対立する断食の実践に議論の中心が移り、最後は古い秩序から新しい秩序への転換が主題となり、そこから伝統的なユダヤ的敬虔とキリスト教的理解との対立が浮き彫りにされていく。後者の伝統的なユダヤ的慣習の問題性を指摘する箇所は、安息日論争を扱う直後の6章冒頭の二つの段落（6:1-5, 6-11）への橋渡しとしての機能を果たしている。

この段落は、断食をめぐる問答（33-35節）と、その問答をもとに古いものと新しいものとの不一致性について論じた比喩と格言（36-39節：継ぎ当ての比喩、ぶどう酒と革袋の比喩、古いものへと愛着に関する格言）から構成されているが、両者を切れ目なく結んでいるマルコとは異なり、ルカは後者を ἔλεγεν δὲ καὶ παραβολὴν πρὸς αὐτοὺς という表現¹⁷で導入することにより、両者を明確に区分している。

4.3. 資料と編集

この段落は、全体としてマルコ福音書2章18-22節及びマタイ福音書9章14-17節に並行している。この段落においても、マルコの並行箇所の導入部（マコ2:18a）や前節を反復する同2章19節cの欠如、ἐπιράπτω（マコ2:21）に代わる ἐπιβάλλω の使用（36節／マタ9:16）、εἰ δὲ μή（マコ2:21, 22）に代わる εἰ δὲ μήγε（36, 38節／マタ9:17）等、マタイとルカの間に弱小一致が多少見られるが、両者の一致はここではそれほど顕著ではない¹⁸。前半の33-35節の断食問答は、マルコ福音書2章18-20節を短縮しつつ再構成されており、これに続く36-38節の二つの比喩も同2章21-22節をもとに編集的に構成されている。その一方で、ルカにしか見られない末尾の39節は異なる伝承（ルカ特殊資料）に由来し、編集的にこの箇所に挿入されたのであろう。すなわちルカは、マルコ福音書2章18-22節を主な資料として用い、別個の伝承に由来する39節を付加し、自らの視点から編集の手を加え

¹⁷ ルカ6:39; 12:16, 41; 13:6; 14:7; 15:3; 18:1; 20:9, 19; 21:29参照。

¹⁸ Bovon, op. cit., p. 255 n. 10; Ennulat op. cit., pp. 73-77も同意見。

つつ、この箇所を構成したのであろう。因みにこの箇所についてはトマス福音書の語録104及び47に並行箇所が認められるが¹⁹、伝承史的観点においてはあまり重要ではなく、いずれもルカのテキストに依拠していると考えられる。

5. 安息日の麦穂摘み（ルカ6:1-5）

5.1. テキスト

1 ある安息日に、彼（イエス）が麦畑を通って行ったとき、彼の弟子たちは麦の穂を摘み、手でもんで食べた。2 ファリサイ派のある人々が、「なぜ、あなたたちは安息日にしてはならないことをするのか」と言った。3 そこでイエスは彼らに答えて言った。「ダビデが彼自身も共にいた者たちも飢えていたときに何をしたか、読んだことがないのか。4 彼は神の家に入り、祭司以外は誰も食べてはならない供えのパンを取って食べ、共にいた者たちにも与えたではないか。5 そして彼（イエス）は彼らに「人の子は安息日の主である」と言った。

5.2. 文脈と構成

宴会での一連の問答（5:29-39）のあと、舞台は徴税人のレビの自宅を離れ、安息日における二つのエピソードが記される（6:1-5, 6:11）。いずれのエピソードにおいても、安息日規定をめぐるイエスとファリサイ派らの敵対者との論争が主題となっており（4:31; 13:10-17; 14:1-6も参照）、ルカの文脈においては、マルコの並行箇所とは異なり、両者は同日の出来事として語られていないが、それでも *Ἐγένετο δὲ ἐν σαββάτῳ*（ある安息日に）という最初の段落の書き出しに対して二つ目の段落が *Ἐγένετο δὲ ἐν ἑτέρῳ σαββάτῳ*（別の安息日に）という表現（6:6）で始まっており、両者は形式的にも結びついている。また、ファリサイ派の人々との論争の中で伝統的なユダヤ教の律法理解が批判されている点において、こ

19 トマス福音書語録104は部分的に34節の婚礼の客の比喩に並行し、ここでも断食と祈りが結合している。また同語録47は36-39節に並行しているが、継ぎ当ての比喩、ぶどう酒と革袋の比喩、古いものへの愛着に関する格言が、ルカ福音書の記事とは逆の順序で記されている。

これらの段落も先行する諸段落（5:17-26, 27-32, 33-39）と結びついている。さらに、ここで扱う安息日の麦穂摘みのエピソードは、弟子たちの振る舞いが非難されている点のみならず、麦の穂を食べるという食事のモチーフにおいても先行する宴会の場面と密接に結びついている（5:30, 33参照）。この段落は、①導入部：弟子たちの麦穂摘み（1節）、②安息日規定をめぐる問答（2-4節）、③結語：安息日の主（5節）に区分できる。

5.3. 資料と編集

この段落はマルコ福音書2章23-28節及びマタイ福音書12章1-8節に並行しているが、ルカはここでもマルコの記事を資料として用い、それ以外の資料は用いずにこの段落を編集的に構成したと考えられる。その一方で、ルカとマタイとの間には、ἥσθιον/ἐσθίειν（「麦穂を」食べる：1節／マタ12:1）や μόνους/μόναις（4節／マタ12:4）の付加、ὁδὸν ποιεῖν（マコ2:23）、χρεῖαν ἔσχεν（同2:25）、大祭司アビアタルへの誤った言及（同2:26）及びマルコ福音書2章27節全体の欠如、時間表示（τοῖς σάββασι δὲν σαββάτω）に対する ὁ οὐκ ἔστινの前置（2節／マタ12:2）、ἐλεγὼν λέγει（マコ2:24, 25）に対する εἰπαυεῖπεν（2, 3節／マタ12:2, 3）、τοῖς σύν αὐτῷ οὖσιν（マコ2:26）に対する τοῖς μετ' αὐτοῦ（4節／マタ12:4）、ὁ υἱὸς τοῦ ἀνθρώπου ... τοῦ σαββάτου（マコ2:28）から τοῦ σαββάτου ὁ υἱὸς τοῦ ἀνθρώπουへの順序の逆転（5節／マタ12:8）等、比較的多くの「弱小一致」が認められる。それらすべてを相互に独立した編集として説明することは難しいと考えられることから²⁰、現行マルコとは異なるマルコの改訂版を想定すべきであろう²¹。

20 Fitzmyer, op. cit., pp. 605-606に反対。

21 ルツ、前掲書、299-300頁；Klein, op. cit., p. 229；M. Wolter, *Das Lukasevangelium*. (HNT 5), Tübingen 2008, p. 233も同意見。因みにベザ写本は5節を10節のあとに置き（マルキオンも同様）、以下の文を加筆している。「同じ日に彼は安息日に働いている人を見て、彼に言った。人よ、もしあなたが知っていることを知っているならば幸いである。しかし、もし知らないならば、あなたは呪われ、律法を破る者である」。J. Jeremias, *Unbekannte Jesusworte*, Zürich 1948, pp. 12, 45-48はこれをイエスの真性の言葉と見なしているが、大半の研究者はこの見解に否定的である（蛭沼寿雄『新約本文学演習—ルカ福音書（I）』、新教出版社、1989年、236-237頁やKlein, op. cit., pp. 231-232参照）。

6. 手の萎えた人の癒し（ルカ6:6-11）

6.1. テキスト

6 また、別の安息日に彼（イエス）は会堂に入って教えていた。そこに一人の人がいたが、彼の右手は萎えていた。 7 律法学者たちやファリサイ派の人々は、彼（イエス）を訴える〔口実を〕見出すために、彼が安息日に癒すかどうか、うかがっていた。 8 しかし彼（イエス）自身は、彼らの考えを見抜いており、その手の萎えた男に「立って、真ん中に進み出なさい」と言うと、彼は立ち上がって進み出た。 9 そこでイエスは彼らに言った。「あなたたちに尋ねたい。安息日に許されているのは、善を行うことか悪を行うことか。命を救うことか滅ぼすことか」。 10 そして、彼ら全員を見回して、彼に「あなたの手を伸ばしなさい」と言った。彼がそのようにすると、彼の手は元通りになった。 11 しかし、彼ら自身は狂気に満たされて、イエスをどうしてやろうかと互いに話し合った。

6.2. 文脈と構成

前段に続いて、ここでも安息日のエピソードが語られる。前段の最後で「安息日の主」として表明されたイエスの働きが、ここでは安息日におけるイエスの具体的な癒しの行為（4:31-37; 13:10-17; 14:1-6参照）を通して示されている。前段に引き続いて、ここでも安息日規定をめぐるイエスとファリサイ派らの敵対者との対立が描かれ、前述したように前段と同様の表現で始められている。その一方で、ここでは前段とは異なり、弟子たちの振る舞いが問題にされているのではなく、イエス自身が安息日規定を破っている。さらにここでは、論争物語の要素（7-8a, 9, 11節）のみならず、治癒の奇跡物語の要素（6b, 8bc, 10節）も含まれ、両者が折り重なるように構成されているが、焦点は明らかに前者に当てられている。この段落はまた、後続の段落（6:12-16）とも、Ἐγένετο δὲ ἐν ... ἐξ, εἰς, εἰλεῖν αὐτὸν εἰς ... という共通の書き出し表現によって結びついている。さらに、この段落と前出の「中風患者の癒し」（5:17-26）は、いずれもイエスの癒し行為とそれをめぐるファリサイ派や律法学者との論争について述べており、

これに加えて、イエスの教えについて言及している点において共通している。この箇所全体は、①導入部：イエスの会堂での教えと手の萎えた人（6節）、②敵対者たちの観察とイエスの癒し（7-10節）、③結語：敵対者たちの怒り（11節）に区分できる。

6.3. 資料と編集

この段落はマルコ福音書3章1-6節及びマタイ福音書12章9-14節と並行しており、ルカはここでもマルコの記事を主な資料として用いており、他の資料の存在は想定しにくい。また、この段落におけるルカとマタイの弱小一致は比較的限制られており（例えば、ἐξηραμμένην [マコ3:1] に対する ξηρά [6節/マタ12:10] や λέγει [マコ3:4] に対する εἶπεν [9節/マタ12:11]、θεραπεύει の前の αὐτόν [マコ3:2] の欠如 [7節/マタ12:10]、τὴν χεῖρά [マコ3:5] への σου の付加 [10節/マタ12:13]、ヘロデ党への言及 [マコ3:6] の欠如等）、いずれの箇所も、両福音書記者の独自の編集として理解できる²²。ルカはまた、前述の ἐγένετο δὲ ἐν ... で始まる書き出し部分（6:6a）を始め、幾つかの箇所で編集の手を加えているが、それは総じて形式的な側面に限られている。その意味でも、ルカはマルコの記述をもとに、彼自身の視点から適宜編集の手を加えつつ、この箇所全体を構成したと見なしうる。なおマタイにおいては、まず安息日における癒しの是非に関して敵対者がイエスに問いかけ、それに対して、イエスが穴に落ちた羊の比喻（14:5参照）を用いて答えるという展開になっている。

結び

以上、ルカ5章12節から6章11節に含まれる計六つの段落のテキスト分析を通して、各段落の資料について検討してきたが、断食問答（5:33-39）と最後の手

22 一方で Ennulat, op. cit., p. 93は、その可能性を一応認めながらも、マタイとルカの一致した編集作業の想定に対して疑念を表明している。

の萎えた人の癒し（6:6-11）を除く四つのテキストにおいては、マタイとルカとの間の弱小一致が顕著であり、それらの一致点を両福音書記者の個別の編集作業の結果と見なすことは難しいという点が確認された。このことは、少なくともそれらの段落においては、両福音書記者が用いたマルコ資料が現行のマルコ福音書そのものではなく、その改訂版であったことを示している。また、他の二つの段落においては弱小一致がそれほど顕著ではなかったが、そうかといって決して皆無であったわけではない。そのような分析結果を勘案するなら、ルカは現行のマルコ本文とその改訂版の両者を保持し、箇所によって使い分けたと想定するよりは、ルカは一貫してマルコの改訂版を用いていたと考える方が自然であり、現行マルコ本文とその改訂版との差異は箇所によって濃淡があったと考えるべきであろう。そのような意味でも、ルカとマタイが保持していたのは現行のマルコ福音書とは異なるマルコの改訂版であり、両者はそれを資料として用いつつ、それぞれの福音書を作成したのである。